

臓器提供・移植におけるもう一つの啓発 ～いのちの授業～

Classes on Life: Teaching the importance of life including organ donation and transplants

佐藤 毅*1
Takeshi Sato

Keywords

いのちの授業, 死生観, 4つの権利, 変わる

Classes on Life, Perspectives on Life and Death, Four Rights, Change

中学校・高等学校の教員として、生徒たちに強く伝えたいことは、自身の教科指導はもちろんのこと、特に「いのちの尊さ・重さ・大切さ」である。自分の「いのち」、身近な人の「いのち」、他人の「いのち」を見つめ直し、生きる力を培って欲しいという思いがある。

臓器移植のストーリーには、死ぬ人、生きる人、そして、医療従事者をはじめとする様々な人たちが携わってくる。現在、生徒たちが臓器移植を知り、学び、考え、社会の現状や法律を理解する機会があまりにも少ない。このような授業を通し、「いのち」について具体的に考えることが可能となり、移植医療の大切さ、いのちの大切さを実感して、今後の社会が変わっていくことを望んでいる。

(腎移植・血管外科, 27:177-183, 2015)

As a teacher of health and physical education at junior and senior high school, one of my main focuses is to teach students the importance of life and how we need to value and respect life, in addition to teaching the usual curriculum. My wish is for students to nurture a "zest for living" through the reflection of their own life and others' lives.

Throughout the course of an organ transplant procedure, there are a lot of people involved: a donor who dies, a recipient who lives, medical workers, and others. These days, students have few opportunities to hear, learn and think about organ transplants and understand current situations in society and the laws surrounding them. Hopefully, my lectures can encourage students to think about their lives actively and understand the importance of medical transplants and human lives, which would lead to a change in the perception of organ donation in our society.

*1 学校法人トキワ松学園 トキワ松学園中学校高等学校 Tokiwamatsu Gakuen Junior and Senior High School

はじめに

教育現場では、いじめや自殺の問題が増加傾向にある中、「いのちの授業」の重要性が高まっている。

私が「いのちの授業」に力を注ぐ理由は、小学5年生の時に担任の先生から受けた「いのちの授業」が大きく影響している。当時は「生」にスポットが当てられ、親から子という縦のつながりの図式であった。近年、高齢化問題、終末医療の問題、そして、医療が進歩し、「生」に加えて「死」についても考えることが多くなった。現在は、親子の縦のつながり以外に、縦・横・斜めといった、他者との「いのち」のつながりの可能性について考える機会も膨らんでいる。以前に増して、「死生観」について考えることが必要なこととなってきているのではないだろうか。

日本では「死」という問題を覆い隠す傾向があり、特に教育現場ではどちらかというとタブー視されてきた。しかし、「生」があれば必ず「死」があるように、生きていくためには避けることのできない現実と直面し、若い時にじっくりと「死生観」に向き合うことは、生徒たちの人生を充実させるためにも必要不可欠なことだと考える。

この「いのちの授業」は、高校2ヶ年で履修、実施するテーマを「生老病死」と設定し、「生きる

力」を培うために、「生」だけでなく「老」、「病」、「死」と体系化させている。タブー視されてきた「死」を取り上げることで、本当の意味での「生きる力」の育成を目指した。日本においては、臓器移植法が1997年に施行、2010年には改正され、臓器移植によって救える「いのち」が増えてきた。1997年以前では、臓器移植による生命の存続のストーリーは成り立たなかった。このストーリーの中には、死ぬ人、生きる人、それに医療従事者をはじめ、さまざまな人たちが携わり、何よりもそこには家族の気持ちが大きく関わってくる。そのため、現在の社会において、臓器移植を題材にした授業は注目され、生徒たちに「いのち」について考えさせることに最適な題材といえる。心掛けていくこととして、ただ単に臓器移植を教えるのではなく、臓器移植を題材にして、「いのち」について考える“きっかけ”を提供するというところに重きをおいて授業計画の作成に取り組み、実施している。その結果、「移植医療」に関心をもち、「いのち」について、友人や現在の家族、そして将来の家族と話し合うことができる生徒が一人でも多く育ってくれることを願っている。

本稿では、2000年度から実践している高校保健授業 (Table 1)、他校の教員からの依頼により、2013年度から行っている出張道徳授業 (Table 1) を報告する。

Table 1 : 授業概要

高校保健

本校高校保健 (2か年目)*	2000年度～現在	50分×11コマ
-------------------	-----------	----------

※高等学校学習指導要領¹⁾には、「原則として入学年次及びその次の年次の2か年にわたり履修させるものとする。」と記されている。本校では教育課程カリキュラム構成上、2000～2013年度は1、2年次に、2014年度～現在は、2、3年次に履修、臓器移植を取り上げるのは、2か年目。

補) 上記とは別に、2006年度より、毎年2月に3年生を対象(任意)にして、教養講座を開講。(公社)日本臓器移植ネットワークを訪問し、約130分の「学生訪問・見学勉強会」を行っている。

出張道徳

千葉県立千葉中学校 (3年生)	2013年10月1日	50分×3コマ
桜華女学院中学校 (1, 2年生)	2013年10月31日	50分×3コマ
目黒区立第八中学校 (3年生)	2014年3月10日	50分×3コマ
千葉県立東葛飾高等学校 (1, 2年生)	2015年7月4日	50分×3コマ
目黒区立第八中学校 (3年生)	2015年11月26日	50分×3コマ

1. 指導計画・方法

1-1. 高校保健授業

現在本校では、2, 3年次に保健を履修させている。2年次は、ビッグバンに始まり、原子、分子、裸子植物、被子植物、各生物の受精といった具合に生命誕生を取り上げ、年間を通し、「生」にスポットを当てる。授業を受けることによって、新聞やニュースに目を向けさせ、日常生活の中で「生」についての情報をキャッチできるようにアンテナをしっかりと立てておくことを意識させる。そして、「いのち」について、友人や家族と自然に会話できる習慣が身につくような指導を計画している。3年次は「死」にスポットを当て、臓器移植、終末医療、安楽死・尊厳死、平穏死について授業を進めていく。

臓器移植について取り上げるのは、3年次の1学期で、4月から7月までの約3ヶ月間の約11回の授業である。前年度での授業終盤で、次年度の「死」についてスムーズに考えることができるように、準備を整える。新年度を迎え、100%の確率で誰にでも訪れる「死」について、今後の自分や家族（特に親：親が先に死ぬのは自然の摂理で、誰もが生まれた瞬間から、死に向かって生きていくという現実を改めて意識させる。）が「死」に直面するような機会が訪れたらどうするか？など、これからの生活に結び付け、授業開始する。

1-2. 出張道徳授業

この授業は、学習指導要領・道徳 第2内容3(1)²⁾を柱に据えた。また、第2内容2(2)²⁾4(1)²⁾を意識し、単に臓器移植の話題に留まらず、身体がどのように構成され、健康とはどのようなことなのかを授業前半に設定した。また、私自身の37回の献血、骨髄移植（2012年にドナー候補になった経験）の話や、福澤諭吉の『学問のすすめ』を紹介し、社会貢献や勤労の大切さについても意識をした。そして、講義を聞くだけでなく、家族の意見を聞く宿題や意見発表会を設定した。

1-3. 計画時の留意点

高校保健授業、出張道徳授業共に「変わる」という言葉をキーワードにして授業計画を行っている。本授業を受ける前と後では、自分の考えがどのように変わったのかを意識、表現させるために、随所にキーワードとして「変わる」を登場させることを意識した。

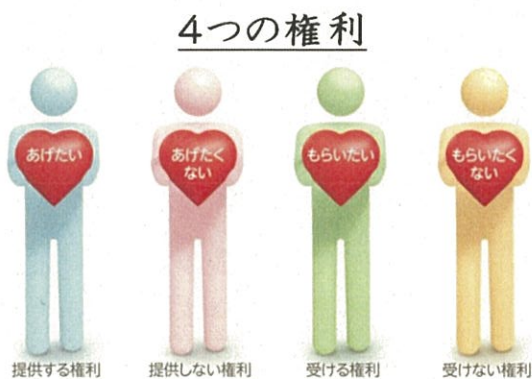
今までの経験から、「いのち」「臓器移植」というと、「硬い」「まじめ」「難しい」といった印象を持ち、思考回路がいつもより遅くなり、停止してしまう生徒が多かった。特に出張道徳授業では、見ず知らずの人が来て、「いのち」「臓器移植」のことを話すため、特に導入部分では、普段通りの思考回路になるように、じっくりと時間を掛ける必要がある。

近年の教育界を振り返ると、知識を詰め込む（＝インプット）ことを重視した教育が広がってきたように思われる。しかし、インプットしたものを、自分の言葉で他人に伝える（＝アウトプット）ことで本当の意味での習熟といえるのではないだろうか。そのため、本授業では、知ることと考えること、そして、伝えることを結び付けるように心掛けた。それらのことを踏まえ、知識をただ詰め込むのではなく、「インプット+アウトプット=変わる」を念頭に置き、以下の3つのことを随所に組み込んでいる。①インプットする状態を高めるために、発問を多く設定し、発言を促す。最終的にインプットしたものをアウトプットさせることを意識させ、それにはまずは自分が聴かなければならないことを授業冒頭に説明する。しっかりと他人の意見を聴いた上で、アウトプットする準備を整えさせた。性格的に発言が厳しい場合は心の中でつぶやくように指導する。②授業終盤には、インプットしたことを他の人に伝えるアクティビティを設置した。③授業から学んだことや初めて知ったこと（インプット）を振り返り、考え、書き出す（アウトプット）ことを実践できる形式のリアクションペーパー（感想用紙）を作成し、実施する。

本授業を進めるにあたって最も大切なことは「4つの権利」³⁾ (Fig 1) である。どの権利も尊重され、このことを周知させる必要がある。次に大切なことは、この「4つの権利」をすぐを選択させるのではなく、授業を通し、自分の意思を決定すればいいのだと伝え、そして、その決定した意思は一生続く答えではなく、今後の人生の途中で何度も変わってもいいものだと繰り返し伝える。また、すぐに臓器移植とは何かという内容に移っていくのではなく、まずは脳についての生理学的、医学的な話をするようにして、導入にじっくりと時間をかけるように配慮している。そして、話が抽象的にならないよう、なるべく明らかになっている数字を公表し、より具体的に、考えやすくするように心掛けている。例えば、年間の日本の死亡数は「たくさん」「多くの」ではなく、「約 126 万人」と表現し、年間の日本の脳死者数は「非常に少ない」ではなく、「年間死者数の約 1% 以下」という表現に加え、「約 12,600 人」で毎日「1 クラス分」「約 35 人」が脳死になっているというように具体的な数字を明らかにして、身近で日常生活の中にある数字と比べられるように努めている。

そのほか、内容が「死」というデリケートな問題なので、身内等に不幸があっても、授業を聞くことが辛いときには、保健室で休むことを認めている。

Fig 1



2. 実践内容

2-1. 高校保健授業 (Table 2)

高校保健授業は、1コマが50分の授業で、計11回行う。10回目には、臓器移植コーディネーターに本校へお越しいただき、クラス毎に『一人ひとりのいのちを大切に』というタイトルの下、実際の現場での対応や症例を交えて、講義をしていただいている。

1コマの授業構成は、10回目以外、50分の授業を45分と5分に区切り、先述したように、最後の5分で、リアクションペーパーを実施する。板書は3~4枚程度にし、全て手書きで、1枚の板書で10~15分掛けて授業を進める。

2-2. 出張道徳授業 (Table 3)

出張道徳授業は、計150分の授業で、初めの100分は40枚のPower Pointを使用しながら授業を進める。生徒たちには、スクリーンに映し出すPower Pointを穴埋め・書き込み式スタイルにしたものを配布する。授業終盤に、家族と話し合う宿題を提示、説明をする。

100分の授業後は、宿題を各家庭に持ち帰り、家族と「4つの権利」を前提に話し合う。そして、翌週に、担任の先生が意見交換の授業を進める。この時間では、他者の意見を聴き、自分自身の考えと照らし合わせながら、自分の「死生観」を深めていく。

3. 成果と課題

3-1. 成果

生徒たちは、この臓器移植の授業を受け、「いのち」について考えることによって、自らの考えや「死生観」が形成されていく。生徒の感想からも、成長、変化していく様子がわかり、その成果が見られる。以下に生徒、そして、保護者の感想を挙げる。

Table 2: 高校保健 授業内容

*1コマ50分

1回目	「今年度・今学期の説明」 「4つの権利」
2回目	「脳の特徴」 「脳の機能局在について」
3回目	「死とは」 「哲学とは」 「死の種類」
4回目	「臓器移植とは」 「移植可能な臓器の種類」
5回目	「脳死と植物状態の違い」
6回目	「脳死下での許容時間」 「法的脳死判定」
7回目	「世界の歴史」 「日本の歴史」
8回目	「用語の説明」 「欧米と日本の死生観の違い」
9回目	「件数」 「免疫について」 「拒絶反応とは」
10回目	臓器移植コーディネーターの講義(2011年度より実施)
11回目	「様々な問題点」 「意見交換」 「まとめ」

Table 3: 出張道徳 授業展開

① 導入 (20分)	約20分掛けて導入(以下の3点を確認) *「生」「死」という言葉が頻繁にでること。 *真面目は前提でリラックスして受講して欲しいこと。 *決まった答えがないこと。(4つの権利)
② 展開前段 (50分)	身体、臓器移植について *自身の身体について考え、「いのち」の話題に結び付けやすくする。 *移植医療の説明をする。
③ 展開後段 (30分)	実生活にあてはめる *臓器移植が必要になった場合、どのような選択をするか、家族・自己の問題として結び付ける。 *帰宅後に家族の意見を聴く宿題の説明。
④ 終末段階 (50分)	意見交換・発表 *復習として、(公社)日本臓器移植ネットワーク作成のDVDを視聴。(15分) *少人数の班に分かれ、家族での話し合いの結果を発表する。(35分)

< 高校保健 >

「脳死になったドナーの臓器が誰かの助けになり、そのドナーの方の死の重さが、レシピエントの生の重さに変わることは、すごいことだと思いました。変な言い方かもしれませんが美しいことだと思いました。」

「臓器移植について学び、自分の死、他人の死を考えると、生き方が変わってきた。」

「臓器移植の成り立ちや日本人の考え方と海外

の考え方の違いを知り、今でも臓器移植についてテレビや新聞に載っていると、目を向けて、家族と話し合っている。」

「私は小学3年生の時に父を亡くしました。今まではただ辛いだけでしたが、先生の授業を受けていくうちに新しい考えや知識が増え、今まで違った視点から死に向き合うことができるようになりました。そして臓器移植について母と会話を重ねていくと、母の死に対する考えを知ることができました。これからも自分の死についての問題を

投げかけていきたいです。」

「一人ひとりの行動や発言で、一人でも多くのいのちが救えるかもしれないということに気づきました。私はその力になりたいと考えます。社会的にもっと理解や関心が高まって欲しいと思います。」

「毎週の授業後に家族で討論する貴重な時間を持てました。」

<出張道徳>

「これまでの人生、多くの人に支えられて生きてきました。これからは自分のいのちを大切に、他の人のいのちも支えながら生きていきたいです。いのちとはたくさんの人の支えのうえで成り立っているものだと思います。」

「生きてるといつかは死ぬということを意外と意識しないででしたが、今回の授業を機会に心に留めておきたいと思います。それから、『あなたの意思で救えるいのちがあります。』という言葉に、はっとさせられました。本当にその時には冷静になれないと気付かせていただきました。家族で話そうと思います。」

「社会貢献することや人を助ける事の重みを改めて知り、考え直すことができた。佐藤先生の授業のように、世の中の人々をもっと命について考える機会があればいいと思う。」

3-2. 課題

この授業を始めた2000年度から4～5年は、保護者から、「脳死は人の死ではない。」「なんでこんなことを教えているのか。」などといった手紙ももらったこともあった。そして、同僚の教員から、「無理やり臓器移植を生徒に勧めているのではないのか。」「まだ社会には反対の声が大きいので、臓器移植をテーマにした授業はしない方がいい。」といわれることもあった。また、何度も授業を見学にくる教員もいた。現在は移植医療が社会に浸透しつつ、周囲の理解が得られ、そのようなことはなくなった。今後、教育現場で移植医療をテーマにした授業が充実し、より一層認知度が高まって欲

Table 4:「臓器移植」の教科書記載量

『高校保健』

A社	159ページ中	コラムのみ
B社	168ページ中	5行のみ

補)

中学保健……2社記載なし、1社コラムのみ
 高校公民科…各社『現代社会』に数行
 高校理科……各社『生物基礎』に数行

しい。

現行の学習指導要領^{1,2)}に「臓器移植」という言葉が記載されているのは、高校保健のみで、しかも教科書を見てみると、その量は非常に少ない(Table 4)。また、厚生労働省が作成している小冊子『いのちの贈りものあなたの意思で救える命』(A5版8頁)が中学3年生を対象に全国の全ての中学校に配布されているが、多くの中学校では特に説明もなく、配布するだけで終わってしまっている現状がある。文部科学省は、道徳教育の充実を図るために、2018年度から小学校、2019年度から中学校で道徳を「特別の教科化」に格上げし、検定教科書を使用すると発表している。その際、この「臓器移植」というテーマが単なる1つのトピックではなく、道徳をはじめ各教科の教育課程に組み込まれることを期待する。

教育・教科書の管轄である文部科学省と、臓器移植の普及啓発、研究、調査をまとめている厚生労働省が連携を密に取り合い、社会の認識がより深っていくことが課題であると考える。

おわりに

一般市民の移植医療に対する無知や、誤った知識をなくしていくために、正しい知識を得る機会や、現在の状況を知る機会が少ないことが懸念される。

次の新しい時代を担う生徒たちに、臓器移植を題材としたこの「いのちの授業」は、移植医療について、いのちについて、考えるきっかけとなるはずである。そして、心に変容が見られ、自分の「いのち」、身近な人の「いのち」、他人の「いのち」

ち」を見つめ直し、生かされているということに気付いて欲しい。

今後起こりうる問題として、家族で臓器移植について考え、話し合うことはとても重要で、まさに「いのちの尊さ・重さ・大切さ」といった「いのち」について具体的に考えることができるようになるのではないだろうか。この「いのちの授業」を通し、臓器提供・移植を知って、自らの問題、社会の問題として考え、判断できる生徒が一人でも多く育ってくれることを願っている。

参考文献

- 1) 文部科学省：高等学校学習指導要領
- 2) 文部科学省：中学校学習指導要領
- 3) (公社)日本臓器移植ネットワーク HP：
<https://www.jotnw.or.jp/studying/1-2.html>